平成２０年度活動報告

平成 20 年度の主な活動を次の通り報告します。(最新情報から掲載しています。)

平成 21 年 3 月 1 日（日）、木下駅自由通路オープン記念、「歴史をつなぎ、街中をつなぎ～人々をつなぐ　町屋ひな祭り」が木下の武蔵屋まちかど博物館で開催された。平成 19 年 12 月、国登録有形文化財に指定後、最大規模のイベントとなった。今回は昨年以来の印西市茶道連盟、印西市国際交流協会、印旛高校、地元町内会有志そして木下まち育て塾との協働により実現した。朝 10 時前には市民が待ちかねていた。お茶会には童女も、そして南米市民、圧倒的に女性の参加者が多かったのが特徴である。広範な協働が実現した瞬間であった。しかし、何よりもこれまでに成功させた原動力は武蔵屋のご夫妻である。武蔵屋が開館して早、5 年、歴史が人とまちを変えつつある。

左：この日の武蔵屋。12 月の町屋寄席に続く、大型企画で市民を迎えた武蔵屋。大正 3 年（1914）に現地に利根川縁から移築された。正確な築年は不明であるが、筆者は二階へ階段が幅広で大人二人が行き来できる、明治 11 年の旅館業の史料があることから、この旅館経営時の明治初年まで遡る可能性も捨てない。しかし、二階はやや道路よりの傾斜しており、今後、早急に手をいれる必要性に迫られている。
右：ポスターと看板。ポスター武蔵屋奥様が作成したものですが、素晴らしい作品です。今回の成功の影には奥様の絶大な支援があったものと推察しています。ごくろうさまでした。

左：雛飾りと打ち掛け。雛飾り自体はそう古いものではないとのこと。手前の竹はもちろん印西の竹です。茨城県の真壁もすっかり有名になりました。このような歴史空間にまさにぴったりである。
　「市民等が古き町屋に雛飾り歴史空間ぬくもりの出ず」（詠み人知らず）
右：二階に展示された子供用式服。二階も展示会場となった。二階は人数制限を実施した。手を入れないといけない。この空間を護るためにも。

左：お茶会で繁昌する武蔵屋
この日、10 時の開館と同時に多数の市民が来館した。画面のように午前中は順番待ちの市民が多数いた。小雨、寒さの中、来館を感謝します。
右：裏千家の作法を披露する、茶道連盟の方と和菓子を食する市民と少女　連盟からは今回、何と 18 名の方に支援していただいた。深く感謝します。今回は子供の参加が目立ちました。ほんとにいいことです。和菓子は筆者も毎月のように買っている「川村」さんです。季節感のある和菓子、とても好きですね、最近は。明治期の木下には「トラカシヤ」と今も続く「壁藤」という二軒の大きな和菓子屋がありました。今月は桜、春鳥のねりきり、菜の花の上生菓子でした。来月も楽しみです。

右：薄茶をいただく南米系市民の童女と母。今回は国際交流協会との協働もあり、この場面が実現した。この少女がどのような感想をもったのか、今後が楽しみである。しかし、とても「カワイイデス」。
左：武蔵屋を支援する地元町内会の方々　甘酒、きぬかつぎ、木下煎餅、草餅、相当前から準備していただきました。皆、絶品でした。又、来年もお願いします。
　「童女らが市民茶会の薄茶受く隣れる母に問ふかおいじらし」（詠み人知らず）

左：煎餅を手焼きする電大女子大生。吉岡まちかど博物館に続き、ここ武蔵屋も電大生が今も補修を続けている。彼女達もいい人生の思い出になるはずである。
右：雛のような童女　何と可愛い童女であろうか。会場に最も相応しい訪問者であった。周囲は一挙に明るくなった。ご両親愛情を一身に受けて愛くるしいばかりである。しかし、このような装束が何の違和感もないのがこの日の武蔵屋であった。

左：茶道連盟面々と武蔵屋ご当主。この日の主役であった。市民に、子供に薄茶を披露していただいた。筆者も昨年に続きいただいた。作法も何も不明なのが恥ずかしい限りである。程よい苦さが気分を引き締める。
右：木下まち育て塾の看板娘。明るさだけは誰にも負けません。木下まち育て塾は彼女達の底抜けの明るさで持っている。

平成 21 年 1 月 24 日（土）、12 月 16 日（火）から始まった木下駅橋上化自由通路開通記念企画展「成田線史とよもやま話＆なつかしの木下駅展」の最終を飾り、午前 10 時から鉄道博士の異名をもつ大貫塾生による講演会が開催された。

左：講演会に集まった市民の皆さん。木下駅新駅開業記念講演会ということで鉄道ファンもつめかけた。
右：大貫講師は塾生最高の語り部である。軽妙な語り口で笑いを誘う天才でもある。写真はそれに感激した某女性ファンが花束を贈呈した時のものである。今後とも元気に成田鉄道の研究を続けて欲しいと願うものである。

左：木下新駅　１月３日、この日は吉岡まちかど博物館の一月の定期開館日。その前に新装なった木下駅に立ち寄る。新駅のデザインでは市民ともめた経緯がある。見ての通り、ちっとも木下の歴史を反映してない。反映してくれたらそれだけで立派な観光資源になったのにと思うと残念であった
右：北口のレリーフ　新駅のレリーフが北、南口に設置された。南口は大貫塾生　駅舎の絵は氏の手になるものである北口のものは「「利根川図志」掲載の木下河岸の図、そして何と、隅田川に停泊する木下の誇る第４、５銚港丸の写真が掲載されていた。この写真は明治 35 年 4 月に、土門拳の最初の師匠である、銚子出身の宮内幸太郎が撮影した記念写真である。とてもいい。一級の歴史的価値のある写真である。木下の明治を語るときこの蒸気船を抜きには語り得ない。

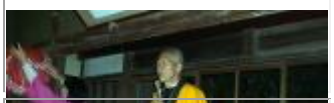
平成 20 年 12 月 16 日、木下新駅が開業した。明治 34 年（1901）以来 107 年の歴史を誇る駅舎がついに解体されることになった。木下まち育て塾も駅舎デザインの継承を要望していたが叶わなかった。しかし、鉄道博士の異名をもつ大貫塾生が描いた木下駅舎が駅舎一角にレリーフとして蘇った。まちの記憶の継承をもっとして欲しかった。

左：12 月 16 日（火）から始まった木下駅橋上化自由通路開通記念企画展「成田線史とよもやま話＆なつかしの木下駅展」のパネル前に立つ大貫塾生（於：印西市中央公民館 1 階ホール）来年平成 21 年 1 月 24 日（土）午前 10 時、印西市中央公民館に於いて成田鉄道写真展の解説と講演会を予定しています。鉄道ファンならずとも必見のイベントです。是非参加して下さい。
右：新駅のレリーフの前の大貫塾生　駅舎の絵は氏の手になるものである。鉄道博士、画伯と多彩な才能の方である。弁もなかなかのものですゾ？！

左：12 月 16 日（火）から始まった木下駅橋上化自由通路開通記念企画展「成田線史とよもやま話＆なつかしの木下駅展」のパネル。大貫塾生が撮影した昭和 30 年代の成田線を走った汽車等懐かしい場面が一杯見られます。　氏はまた、これを記念して「成田線とよまやま話」を発刊しました。これは実は氏が血気盛んな若い頃？！昭和 45 年 8 月 15 日から昭和 52 年 7 月までの 7 年間、39 回に渡り、『いんざい広報』に連載したものです。氏の大作であると同時に今では大変貴重な「歴史」となっています。是非ご覧下さい。

平成 20 年 12 月 7 日（日）午後 5 時から、20 年度木下まち育て塾最大のイベント武蔵屋町屋寄席が始まった。一枚 1500 円、60 枚用意した前売り券は全て完売。地元の支援に支えられているのを実感。武蔵屋ご当主の保存・活用にかける熱い思いが実現したイベントであった。伊藤会長、H塾生の献身的活動も忘れられない。汗をかくこと無くしてこのイベントは実現しなかった。この日は、天気晴朗であった。伊藤会長挨拶、来賓として山崎市長が挨拶。その後、滋賀先生の「木下の町屋」の講演、そして手場沼の内水害[illegible]場の昭和 31 年の工事竣工記念フイルムを上演。辺りもすっかり暗くなった午後 5 時、この[illegible]亭馬治さんの落語とあいな[illegible]った。武蔵屋の本格的活用を世に問うた日であった。

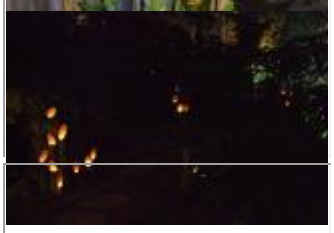
左：この日の武蔵屋。平成 15 年に開館して 5 年目。昨年はついに印西市第一号の登録文化財に指定された。明治期には旅館、そして鮮魚輸送に関係があったことが判明している。吉岡まちかど博物館と共に木下には欠くことができない文化財である。
右：集まった市民の皆さん。1500 円の参加料には木下せんべい、木下銘菓坂東太郎等木下の伝統の食を堪能していただいた。それなりの参加料にも関わらず会場は満員御礼の盛況であった。ほんとにありがとうございました。



左：滋賀先生。武蔵屋を木下の交流拠点にすべく、夏休みから改修工事に専念している。吉岡まちかど博物館、武蔵屋、イシイ電器等先生は印西の蔵町屋の保存活用において最先端で活躍されている。
右：武蔵屋ご当主。熱い想いがこもった口調で武蔵屋の保存活用を語る。その迫力に集まった市民も聞き惚れていた。今は木下まち育て塾の重鎮でもある。イベント終了後のあいさつから

この日の主役金原亭馬治さん(31 才、平成 15 年 7 月二つ目昇進）。氏は印西市民でもある。半年前に印西市民となったとのこと。地元の若手落語家を招待したことが今回の目玉である。今は二つ目。しかし数年後には真打になる。赤毛氈の下は実はビールの箱、それでもこれだけの雰囲気が出る。
氏の落語は演題を二つ。若さ溢れる内容で笑いを誘い、古典落語も披露された。中身の濃い一時間であった。後ろのガラス越しにこの日のもう一つのイベント「竹灯篭の夕べ」が庭園で開催され、幻想的雰囲気を醸しだしていた。
　皆様も是非、この若い落語家に声援を送ってください。

幻想的な「竹灯篭の夕べ」。
左。店前入り口付近におかれた竹。これらの竹の伐採、そして刳り貫き、かなりの時間と手間を要している。不器用な筆者では論外である。画面では不鮮明であるが右の竹は「木下まち育て塾　武蔵屋」、真ん中は「ありがとうございます」、左は「木下を元気に」と彫られている。これらはH塾生及びご当主の作品である。中に蝋燭を入れ、暖かく輝いていた。



左：武蔵屋庭で幻想的な光を放つ竹灯篭
その数、約 100 本の竹灯篭が庭に幻想的に輝いていた。当日は風も無く、絶好の鑑賞日和であった。巷にみる派手な発光ダイ

オードとは全く異なる優しい光源が庭を行く参加者の足元を微かに照らした。 右：馬治さんの落語が終わり、武蔵屋を後にする市民の方々。どんな思いで武蔵屋や我々の活動を思っていただけたであろうか。20 年度最大のイベントも無事成功したといえよう。昨年の吉岡まちかど博物館の三館合同企画展、そして今回の町屋寄席と竹灯篭の夕べ」、小さな試みの継続の中に今後の展望があるように思う次第である。		
10 月 19 日（日）、平成 14 年から数えて 7 回目の秋のまちかど博物館一斉開館です。14 年夏にイシイ電器及びたきたまちかど博物館（いずれも六軒地区）で産声を上げたまちかど博物館、15 年に武蔵屋、16 年に吉岡、17 年に二見屋と順次開館してきました。特に昨年は吉岡まちかど博物館で三館合同企画展を実施するに至りました。さて、今年も様子を報告しましょう。		
吉岡まちかど博物館： 左：今回は柏市から出版ＯＢ友の会一行 25 名が来館されました。世話人のＫ氏はこの 5 月に一度来館され、吉岡まちかど博物館に興味をもたれ今回の一行とともに再来館されました。ありがとうございました。今年はスタンプラリーのテントが蔵の前に設営され、そのため、入館者が倍増しました。 右：頑張るＳ女子塾生。今春入塾した女子大生ですゾ。建築専攻の彼女に期待するとこと大です。これで塾生の新規会員も増えると秘かに思っています。展示も来年は 19 年度レベルはとても無理ですが小さな展示をやろうと考えています。		
二見屋まちかど博物館： 左：今回は、木下を中心とする明治から最近までの地図を展示しました。以前、イシイ電器でも展示しましたが好評、リクエストも多く？！再度の展示となりました。この家は『下総諸家小伝』という天保年会に出版され、100 人の当地域周辺の文化人を紹介していますが、この中になんと親子で紹介されています。 右：この日の二見屋まちかど博物館		
武蔵屋まちかど博物館： 左：平成 19 年 12 月、登録文化財に指定された。活用に熱心なご当主兼館長により、一段と博物館らしくなってきている。この日も見ての通り、過日、旅籠屋をやっていた店に相応しい混雑振りであった。 右：ご当主及び新入塾生（実はＮ女子塾生のご夫君氏）。他の地域活動に忙しいＮ女子塾生の代理として参加したとのことですが、既に立派な塾生です。		
武蔵屋まちかど博物館 2 左：修復途上の湯屋。屋根に東京電気大学」建築学科の一年生諸君が再生に向けて奮闘中である。同大学は平成 16 年、17 年の吉岡まちかど博物館、18 年の武蔵屋、19 年のイシイ電器と毎年、木下地区において再生事業に取組んでいる。素晴らしい。 右：頑張る電大生。現場には今回も地元の大工，Ｉ棟梁の姿があった。吉岡まちかど博物館でもご指導していただいた方である。美しいコラボレーションである。ここは今流行の「足湯」ができる施設にする計画である。一刻も早い完成を待ち望んでいる。		

イシイ電器まちかど博物館： 左：概観。今回は、六軒地区から出た横綱、鳳のパネル展を実施した。印西市からナント横綱が出ていたのである。 右：M副会長及び印西市生涯学習課Ｓ氏。鳳展は木下まち育て塾と市の協働での開催であった。ここは昨年、電機大学により土間が板張りで整備され、美しくなった。来年に期待したい。		
タキタまちかど博物館： 左：Ｏ塾生。鉄道博士でもある。今回、木下駅新装に伴い、写真展を行なうが、全てＯ塾生の写真です。 右：御当主兼館長。蔵活用に大変熱心な方です。明治 40 年前後の蔵が二棟あり、いずれも立派に修復された。頭が下がります。今回もタバコと塩の展示をはじめ、当家に残された史料が豊富に展示された。		
現駅最後の木下祭り： 左：駅前を練り歩く山車。この背景による祭りも今年が最後である。それにしても、こういう祭りの経験のない筆者には大変羨ましい限りだ。 右：夕暮れの山車。好天に恵まれた市民祭りも終わりを告げようとしている。19:20 分の市の無料バスでＮＴへの帰途に着く。昨年の今頃は企画展の真最中であったことが鮮やかに蘇る。		